

公開質問状提出にあたって

「子どもは子どもたちの中で育つ」

「共に学び、共に生きる教育」日本一の大阪へ！ネットワーク 代表
鈴木 留美子

代表をしています鈴木留美子です。昨年10月26日の府民討論会「大阪の教育を考える」で「知的障害」がある息子の親として意見発表をさせていただき、知事から「大阪の『共に学び、共に生きる教育』は必ず守ります。学力テストで排除するようなことは許しません。そのようなことがあったら僕に直接言ってください」とはっきりと答えていただきました。このことはとても感謝しております。

しかし、教育日本一をめざすための施策内容を拝見していると、私たち大阪で「共に学び、共に生きる教育」で育ちあってきた障害当事者、友だち、親たちとしてはとても不安を感じています。「共に生きる」ということは、お互いの個性をあるがままでまるごと認めあい、助け合って生きていくことです。「共に生きる」ことは心の柔軟な小さい子どもほどあたりまえのように自然にできます。今日の意見表明をされる方たちの話を聞いていただければこのことがご理解いただけたと思います。

成果主義・競争主義に立った教育の中では、競争の中には入れないし成果をあげることもできない「障害」のある子どもたちは邪魔な存在になっていきます。そうすると「共に学び、共に生きる」柔軟な心を持った子どもたちの大切な芽を小さいうちに摘み取ってしまうこととなります。「共に生きる」という人間として一番大切な芽を小さいうちに摘み取られてしまった子どもたちが、大人になってどんな社会を作っていくのでしょうか。成果の無いものは不要なものとして排除する、競争で落ちこぼれるのががんばらなかったという自己責任だからしかたがないという考え方を持った子どもたちを育てていくことにならないのでしょうか。

「障害」の有無に関わらず人間は十人十色です。成果主義・競争主義になじまないのは「障害」のある子ども

たちだけではありません。子どもたちは数字のみで測ることができる商品ではなく、さまざまな心をもった人間です。

私の33歳になる息子は、豊中で地域の小学校・中学校・桜塚高校定時制と「知的障害」はあるけれど、ひとりの子どもとしてあたりまえに普通学校で学びあい、育ち合ってきました。息子と友だちの生き様から親として多くのことを学び、「共に学び、共に生きる教育」の大切さを教えられました。それは、「子どもは子どもたちの中で育つ」ということです。障害の有無に関わらず子どもは子どもたちの中で育っていくことが自然であたりまえのことだと思っています。子どもだからまだ小さくてなにも言うことはできないけれど、子どもたちは「分けられたい」とは思っていないはずです。「障害」ゆえに「分けられる」ということは子どもにとって不条理なことではないでしょうか。「障害」があってもひとりの子どもです。決して「特別」な子どもではありません。赤ちゃんや小さい子どもが一生懸命に目で追うのは大人ではなく子どもたちです。

「子どもは子どもたちの中で育つ」ということが一目瞭然ではないでしょうか。でも、大人たちはこのことを忘れて、ひとりの子どもとしてみることをしないで、「障害」がある「特別」な子どもとしてみてしまい「分けられる」痛みを鈍感になっています。

今日、橋下知事に公開質問状を提出し、記者会見を開こうと思った趣旨は、「共に学び、共に生きる教育」で育ち合ってきた、また育ち合っている当事者や仲間、親の思いを伝え、「共に学び、共に生きる教育」の大切さを知事や記者の方をはじめ多くの府民のみなさんに知ってもらいたいからです。

「共に学び、共に生きる教育」への私たちの思い

現在、共に学んでいる立場から

全ての子供達が

「学校に行くのが楽しい!」と思える教育を

前田 美貴代
(身体障害のある子どもの保護者)

私の息子は9才で現在地域の小学校に通っています。今は地域の小学校に通わせていますが、息子の障害があると分かった時は、みんなと同じ事ができないんだから、この子にあった療育や教育を受けさせるのが一番いいと思っていました。でも、息子を育てていくうち、それは私が望んでいたことで息子はそんな事を望んでいなかったことに気付かされていきました。

今、小学校に入りお友達と過ごすなかで子供達から大人の私の方が学ばされる事ばかりです。

・リコーダーを吹いているところです。出来ないところは自然と手伝ってくれます。遊びも蓮と一緒にできるように、子供達がルールを考えて一緒に遊べるように考えてくれます。



・子ども会の探検部で稲刈りに行った時の様子です。地域の方々に支えてもらいながら、いろんな活動や経験を蓮もしています。



もし、蓮が養護学校に行っていたら、私と蓮は地域の中で孤立していたと思います。小さい頃から一緒に過ごすことが地域で生きていく、社会に根付いていくことの第一歩になると思います。

・お風呂に一緒に入っている所です。お友達が「蓮と一緒にお風呂に入りたい」と言ってくれ、初め私がTシャツと短パンで一緒に入れていましたが、慣れてくると「自分らでできるから、おばちゃん来なくていい。」と言われみんなで「お前は体で、オレは足持つから」と子供達で入れてくれるようになりました。そしてその時、蓮がお友達に「ごめんな」と言うとお友達が「何でごめんって言うん?」と言ってくれ、また蓮が「ありがとうな」と言うのと「何でありがとうって言うん?」と言ってくれていました。私はそのやりとりを聞いて涙が出ました。この子達は蓮が可哀想だとか、やってあげるとかそんな関係ではなく、ただ蓮と一緒に遊びたい、一緒にお風呂に入りたい、ただそれだけなんだと、子供達の純粹さに親の私の方が学ばされました。これは、ずっと一緒に学びあったからこそ生まれたものだと思います。



・これは運動会の時の写真です。いつもみんなが「自分が押したい」と蓮の車いすを押すのを取り合ってくれます。このことは蓮にとっても、生きる支えになっています。先日も「お母さん、オレだけ車いすなんて嫌や!ほんまは、みんなみたいにボール投げたり走ったりしたいねん。」と言うので「そしたら車いすに乗っていい事は1つもないの?」って聞くと「みんなが



車いすを押してくれること！」と笑顔で言っていました。蓮にとって車いすを押してもらってお友達と一緒に遊んだり勉強したりして一緒に過ごすことが、障害をもっている「1人の子供」として自分の価値を見出せる、この子の生きる支えにもなっています。

学校という所は勉強だけでなく、いろんな事を学べるところだと思います。

いくら、教科書の上で「道徳」を学んでも毎日実際に接しながら学びあうのとは全く違います。実際、私も蓮を授かるまでは正直障害のある人とどう接しているのかわかりませんでした。同じ事ができないのだから分けた方がお互いのためだと・・・でも、この子供達は違います。どうしたら一緒にできるのかという事を自然に考え工夫し手伝ってくれます。蓮も一緒にいることが当たり前の存在なんです。これは「やさしさとか思いやり」というレベルではなく人としての根本的なものだと思います。大阪はこれまで障害児と共に学ぶ教育が進められてきました。しかし、これから成績重視の方針になり、これまでの大阪の素晴らしい取り組みが後退してしまうのではないかと、障害児がまた障



害を理由に分けられてしまうのではないかと不安でなりません。蓮の「1人の子供として生きる力」を奪われてしまうのではないかと本当に不安でなりません。

成績が上がれば子供達は幸せになれるのでしょうか？障害のある子もいない子も全ての子供達が、「学校に行くのが楽しい！」「明日も早く学校に行きたい！」と思えるような本当の意味の「教育日本一」になればいいと思っています。そして成績だけに囚われることなく、今まで築き上げてきた素晴らしい大阪の取り組みを、この子供たちの姿を、これから全国に広めていって欲しいと願っています。

現在、共に学んでいる立場から
助け合い、協力しあってこそ、
子ども達は成長し、伸びていく

井村 恵美
(知的障害のある子どもの保護者)

保育所時代の子ども達のかかわりをみていた様子から、きっと小学校でも、子ども達は、『迷惑かけられている！』という意識にはならないだろうと期待はしていたのですが、ほんとに期待以上で、私自身も感動させてもらうことが多い小学校時代でした。

私自身が、特にびっくりしたのは、高学年になった運動会で全員リレーが行われた時。周りの子ども達は、もちろん娘がちゃんと走るだろうか？とドキドキしながら見守っていましたが、気まぐれな娘が、ちゃんと自分のコースを走ってくれた時、子ども達は、すごく喜んでくれて……。競技が終わった後も、女の子だけでなく、男の子までもが「ちーちゃん、がんばったよなあ〜。」とその話で持ちきりとなっていた様子を私自身が児童席の後ろで聞いてしまったんです。

娘がいたからリレーで勝つことはできなかったんです。それなのに、負けてくやしい！とか、惜しかったなあ〜！とかの話ではなくて、ちーちゃんががんばってくれて、よかったなあ〜という話の内容だったこと、うれしそうに話していたことで、私も目から涙がポロ

ボロでした。

でも、娘の話を、高校生や大学生にそれぞれする機会があったのですが、運動会の話聞いた高校生や学生さんの感想の中には、「そんなことが、親御さんにはうれしいんですね。」「そんなん勝つことよりも、みんなで一緒にがんばったことの方が楽しいにきまつてるやん!」「当たり前のことだ。」という感想が、やはりそれぞれあったことで、ちょっとハッとして、イチイチ感動している自分が、まだまだやなあ~と思ったのでした。

それと共に、競争を全否定はしないけど、やはり友達同士で、助け合ったり、協力しあってこそ、子ども達は、成長し、伸びていくのだと強く感じました。

もうひとつ印象に残っているのは、6年生のお楽しみ会で、班ごとに出し物をするようになったとき、担任からの連絡帳には、「ちーちゃんの班は、ペープサートをするそうです。さて、どうなることやら・・・?(笑)」と記してありました。というのも、ペープサートは、紙人形ですが、娘は、紙を破ることが大好きで、毎日、一日中でも紙破りをしていたりします。家の中は、ゴミ箱ひっくり返したよう。。。その娘と一緒に紙人形をするなんて。。。と私も「子ども達は、チャレンジャーですね~」と連絡帳に記しておきました。

そして、当日。言葉のしゃべれない娘に、子ども達は、劇が終わった最後に娘には、『おしまい!』と書いた紙を持たせて、最後にそれを見せてビリッと破る、という演出を考えていたそうです。結局、娘は、めずらしく破らなかったそうですが、でも、娘も娘で、友達が皆でがんばってつくっていたものを破ってはいけないと思ったのかもしれない。

ただ、紙を破られないようにどういう対策をするか?!という発想ではなく、紙を破ることが好き! だから、破ってもらおう!という発想になっていくこと。こんな発想が、子ども達の間で出てくることは、当たり前のことが、共に育つということなのだなあ~と思うのでした。

中学になると、子ども達に変化があるかも?と少しだけ心配しましたが、でも、予想通り子ども達は、娘への見方も関わり方にも変化はなく、特別視して過剰に関わるわけではなく、授業中に娘が騒いでも動じることもなく、ただ、必要に応じて、手を貸してくれたり、声をかけてくれたり、自然な関わりをしてくれていま

した。

娘がパニックになって自傷を始めると、女の子達が数人で娘の好きな唄を歌ってくれたり、字が読めない娘なのにお手紙を書いてくれたり・・・。男の子が、掃除を注意してくれて、娘も素直にきいて机を運んだり・・・。

中学になってからの子ども達に、特に変化は感じられなかったけど、中学の先生方の中には、最重度の知的障害児と関わった経験のない先生も多いようで、戸惑われる方もいらっしゃいました。でも、3年生になった時のはじめ、担任の先生から「私も生徒達も、言葉のない井村さんが、なんで怒ってるんやろう?どうしてほしいんやろう?と考えている内に、誰に対しても、同じように相手の気持ちを考えるようになってきた。」と話してくださり、とてもうれしく感じました。

私が娘を通じて学んできたことを、今度は中学でも、子ども達や先生方が少しずつ感じ、娘を通じてじわじわと、目に見えないけど、とっても大切な学び(?)が広がっているようでした。

考えてもみれば、教科書の中に出てくることが直接、生活に生かされるということは普段、あまり考えられない。でも、教科書の中の学習をしていく(知識を増やしていく)日々の過程の中で、私達はものすごく多くの学習をしていたと思う。障害があるなしに関わらず、多様な個性の友達と関わり多くのアクシデントがあつてこそ、多くの学びができたのだと思う。

いろんな発想、いろんなイマジネーション、いろんな感情、そしてコミュニケーション力、そういうもの(心)が、育っていくのだと思う。会社でも、皆でチームを組んで、協力し合う方が結果も出せると思うし、なんといっても楽しい!!ひとりで何もかもするのはなく、それぞれ得意分野を生かし協力し合ってるんですもんね。社会もそう!

実際、大阪の街の人は、発想力も創造力(想像力も?)もコミュニケーション能力も他府県よりも高いのでは?って思える~。

今、障害のある子を排除し、習熟度別のクラス分けなんてしていたら、どんどん子ども達から、それらの力を奪ってしまうことになりかねないって思います。

過去、共に学んできた立場から
いのちと向き合い、共に生きるということ

折田 涼
(障害当事者)

池田市から来ました。折田 涼です。19歳です。昨年4月に大阪府立池田北高校を卒業しました。大学を受検しましたが、残念ながら不合格となり、今は進路を模索中です。

わたしは、気管切開をしていて声を出すことができません。通常のコミュニケーションは、瞼や眉間を動かして合図をおくるといった方法をとっています。

人工呼吸器と共に地域の学校で地域のともだちと一緒に、共に学び共に生きてきた暮らしからの思いを伝えさせていただきます。



わたしは、進行性脊髄性筋萎縮症で、生後6ヶ月から人工呼吸器をつけています。3歳で退院してからは、ずっと地域の中で暮らしてきました。身体的には全身寝たきり状態ですが、ストレッチャー式車いすに乗って、地域の保育所、小学校、中学校、高校に通ってきました。

当時は、保育所への入所も小学校への入学も、行政と何度も交渉しないと入れませんでした。また、人工呼吸器をつけていることから生じる、吸引などの医療的ケアが問題となり、親の付き添いを求められたりしました。しかし、家族や支援者と共に粘り強く交渉を行い、小学校5年生から親の付き添いなく学校に通えるようになりました。寝たきりの状態で24時間人工呼吸器をつけ、地域の学校へ親の付き添いなく通ったのは、全国でも初めてのことです。これは、大阪府が長



年、どんな障害があっても地域の中で共に学び共に生きるという教育の実践をおこなってきたからこそ、実現できたことだと思っています。

学校生活では、先生方やともだちが、わたしもクラスの子供の一人としてあたり前に接してくれ、様々な創意工夫を凝らしながら学校生活に取り組んでくれたので、わたしは、たくさんのともだちと一緒に遊び、学び、多くの経験、体験をすることができました。

通学では、雨の日も風の日も雪の日もありましたが、集団登校の上級生が迎えに来てくれて、みんなと一緒に登校しました。人工呼吸器をつけているから出来ないと思われるようなことも、人の手を借りながら、なんでもクリアしてきました。遠足、プール、運動会、修学旅行。わたしの周りには、いつもともだちがいて、何でも一緒に出来るように考え、手伝ってくれました。わたしは、ともだちと一緒にいろいろなことが出来るのがとても嬉しく楽しかったし、ともだちも同じ思いであったと思います。

臨海学舎では、海に入る為に砂浜にたくさんのスノコを並べて道を作り、車いすで歩けるようにしてくれました。「涼くんも一緒に海で泳ぐやんな!」と、と





もだちが言ってくれ、先生方が入念な準備をしてくださり、実現できました。海で泳げたことは、小学校生活の中でも一番の思い出になっています。

日々の学校生活では、休み時間に遊ぶ時も、給食を食べる時も、日直の仕事をする時も、わたしがそこにいることが当然の日常の風景としてありました。だから、クラスメートも、障害があるとか、人工呼吸器をつけているとかとは関係なく、いつも当たり前のともだちの一人として、わたしと付き合ってくれました。こうした自然な関係ができたのは、ずっと、同じ場所で、同じ時間を過ごし、一緒に学んでこられたからだと思います。



呼吸器をつけている子も、ストレッチャーに乗っている子も、一緒に学ぶことができる学校はとてもステキな学校です。このような学校で学ぶことができ、工夫をし、手助けしてもらいながらも、様々なことにチャレンジできたこと、たくさんの人に出会い、ともだちに恵まれたことは、わたしが今後、自立生活を送っていくための自信と勇気の元になっていると感じています。また、一緒に何でもし、どこへでも一緒に出掛けたことは、わたしだけではなく、ともだちにも先生方にも豊かな経験となって積み重なっていったことと思います。きっと、わたしと一緒に育った人達は、社会の矛盾やバリアも自分のこととしてより身近に感じてくれていたことでしょうし、創意工夫で障害のある人も一緒に生きることができる、そんな学校や社会はステキだと感じてくれたことと思います。そして、この経験が、今後、社会の中で生きていくときに、様々な場所で、また障害のある誰かと、ともに生きることができる豊かな社会を作るときにきっと役立つはずだとわたしは思っています。

わたしは、人工呼吸器が外れるようなことがあれば、数分で命が亡くなるかもしれない状況で生きています。それでも、わたしは、たくさんの人に支えられ、そして、支え、いのちを生きてきました。共に支えあい共に生きる社会がなければわたしは生きていくことができません。でも、それは、わたしだけではなく、誰でも同じなのではないでしょうか。一人ひとりのいのちと向き合い、お互いを思いやり、助けあいながら生きていける豊かな社会は、共に学び共に生きる学校があってこそ、創造されていきます。大阪のこの素晴らしい取り組みを後退させることなく、誰もが共に豊かに生きられる社会を創っていくための教育日本一を目指してください。

過去、共に学んできた立場から
野球もサッカーも高校受験も...
障害をもたない仲間達と学び、遊んだ

北口 昌弘
(障害当事者)

私は、1974年8月21日に高槻で生まれました。生まれた時は仮死状態で、その夜から高熱とけいれんが続き、その結果脳性まひによる手足と言語に障害を持ちました。

私の両親は、私を一人の人間として生きて欲しいという思いがあり、高槻市立保育所の障害児保育を経て、小学校から高校まで地域の普通学校の一般教室で障害をもたない仲間達と学んだり遊んだりしました。

私が小学生の頃は、夕方の暗くなるまで校庭で友達と野球やサッカーなどで遊んでいました。私が野球で遊ぶ時は、大きいバギーに乗っている私がバットを持ってバッターボックスに立つと友達がマウンドから私の1メートル前まで来てくれてバットに当てるように投げてくれて、私が打つと友達が代走で1塁まで走ってくれるという特別ルールで楽しんでいました。

またサッカーでは友達が交代で大きいバギーを押してくれて私にボールがまわってくると、私が自分でボールを蹴って楽しんでいました。その他自宅の前の芝生で友達とカレーパーティーを開いて楽しんでいました。

そして中学生の頃は、高校受験に向けて、友達といっしょに勉強していました。私は10年間近く学校でいじめられて辛い思いをしたことがあったけれど、友達が支えてくれて乗り越えることができました。今でも街へ出掛けると、時々学校時代の友達に会う度に、地域の学校に通って良かったと実感する。もし私が養護学校に通っていたら、いろいろ楽しい経験もしないで、地域で孤立していたと思う。

私は、子供の頃から障害を持つ人達の代弁者になりたいと考えていて、足の親指でパソコンを打って高校受験をしたり、大学や大学院の受験でも足の親指でワープロを打って時間延長を受けて行った。障害を持つ人はなんらかの支援を受けることでみんなとあたりまえの生活ができる。もし教育委員会が高校受験のときにパソコン受験を認めてくれなかったら、私が高校に受験する機会を得られなかったかもしれない。

最近学力テストが話題になり学力を重んじる傾向がある。その結果一部の学校では、障害を持つ生徒を学力テストから排除している。このことは障害者に対する差別だと私たちは考えるので、排除しないでほしい。ただ学力を重んじる傾向が強すぎると、勉強ができる人が有利になり勉強が苦手な人や障害を持つ人達が置き去りになる傾向が否めない。また競争を第一にするので、助け合いや思いやりの心が失われる傾向がある。したがって私達は学校における学力テストに反対します。

過去、共に学んできた立場から
たくさんの仲間に出会い、
色々な事を学びあい笑いあった

上田 哲郎
(障害当事者)

私は養護学校で2年間、その後豊中の小中学校の普通学級で育ち、高校は隣接した市の個性あふれるやんちゃな仲間が多い公立高校で過ごしました。高校卒業後、身体障害者対象の職業訓練校に通いながら大学を目指すため夜間は予備校に通い、大学は大阪でも関西でもない佐賀県にある福祉系の大学に進みました。卒業後一年半レスパイト施設で働きましたが、福祉を再び学びたいと思い通信制の大学院へ入学。修了後は地元の自立生活センターでピア・カウンセラーとして働きながら、近隣の高校で非常勤講師として地域福祉を教え、他には作業所の代表等もやらして頂いております。

養護学校と職業訓練校では分離教育、小・中・高は普通学校で共生教育を受け、大学は大阪のように統合教育が進んでいない環境で4年間過ごした経験から、大阪のともに生きる教育を客観的に視れたように思います。

これまでを改めて考えてみると高校時代から人生が面白くなってきたように感じます。先にも話したように私が通っていた高校は個性あふれるやんちゃな仲間がたくさんいましたし、留年された先輩方もいるそん

な環境で育ちました。大きな声ではいえませんが少なからず世間一般では決して良いとは言えない経験も含めた様々な経験をしてきました。

また、高校時代から関わり続けてきた『障害』をもつ仲間と共に歩む豊中若者の集い（通称とよなかわかつど）は私にとってとても大きな存在です。とよなかわかつどは豊中の全中学校を対象として、卒業生、保護者、教職員に呼びかけ、『障害』をもつ仲間と共に生活するための、悩みや取り組みの交流をはかる場があります。そこではたくさんの仲間に出会い色々な事を学びあい笑いあいました。もちろん私はお客さんではなくて、友達であり先輩であり後輩でありました。とよなかわかつどの仲間と初詣に行ったり白浜まで初日の出見に行ったり、私の中学の頃の友達ととよなかわかつどの友達とで夜中に花火もやったりもしました。またとよなかわかつどの友達と恋仲にもなったような気がします。その恋仲の結果はというと私が九州に旅立ってしまったので・・・という事にしておきます。

私が九州の大学で4年間も過ごせたのは、この大阪の小・中・高校で生活を送ってきた経験があったからこそであって、もしも別学で教育を受けていたら、親元を離れた600キロ先で4年間の一人暮らしは考えられなかったと思います。

障害者はよく経験を奪われてるといいわれますし、実際にそういう場面も目にしてきました。私自身の経験からしか言えませんが、善い経験悪い経験各々の人生経験はたくさんあればあるほど適応できていますし、大人になった今、大阪で育ったが故に社会環境に適応しきれているのだと思います。そんな経験ができる大阪の「共に学び、共に生きる教育」の方向性、これからも大事にしてほしいです。